

貨幣と經濟價值

大野 純 一

本稿の目的とするところは、貨幣は經濟價值性を有するや否やの問題を解かんとするに在る。

貨幣は經濟價值を有するや否やは、殆んど經濟學の誕生と共に發生し、古來多數の論者によつて討究せられたにも拘らず尙今日に於ても解決を見ざる問題の一つである。吾人の考へによれば、かゝる意見の不一致は、貨幣が有し若くは有せずと主張せらるゝ經濟價值概念に關する彼等の解釋の區々たるに基くのである。されば、貨幣に於ける價值性の問題を論ずるがためには、先づ經濟價值の概念そのものを明かにするを要するのである。

一

一般に經濟學上、從つて又貨幣論上に於ける、價值概念に關する從來の論者の説は大別して二とすることが出来る。その一は主觀的價值學説であり、その二は客觀的價值學説である。第一の學説に據れば、「主觀的意

味に於ける價值は、一定の主體によつて彼の福利が何等かの關係に於て一財の所有に依存すると言ふことを意識せらるゝがために、その財がこの主體の利害範圍に對して有する實際的意義である。〔1〕更に此價值を彼等は三分する。即ち一主體の慾望が直接その財の使用によつて充足せらるゝ場合は、此を主觀的使用價值、その財を技術的生産に利用して得た新なる財によつて充さるゝ場合を主觀的收益價值、その財を交換に於て提供し、以つて得たる財によつて充さるゝ場合を主觀的交換價值と名づけるのである。〔2〕他方第二の論者に據れば、「客觀的意味に於ける價值は、吾人の判斷に於て認められたる、一定の外的、客觀的成果をもたらす可き一財の性能である。〔3〕此價值も亦三つの範疇に分れる。一財が直接技術的用途に向けらるゝ時、此を客觀的使用價值と稱し、技術的生産過程を通して他の財を得るために用ひらるゝ時、客觀的收益價值、交換によつて他の財を得るために充用せらるゝ時、客觀的交換價值と言ふのである。〔4〕

以上は從來の價值區分であるが、今此區分を靜かに退いて觀察する時、吾人はそこに何等社會經濟學上重要な區分の原理なきを發見するのである。即ち彼等が同種と看做す價值も、此を社會經濟學の見地よりすれば、全く異なるものであり、又彼等が別種のものとするものも、吾人の見地よりすれば、何等區分の必要なきものたるを知るのである。而して結局三ヶの範疇がそこに對立するを發見するのである。先づ第一に主觀的價值に就いて見るに、主觀的收益價值並に主觀的交換價值は根本に於いて、主觀的使用價值と異なるものではなく、兩者は共に此價值に歸屬する。只前二者は間接の使用價值であり、後者は直接の使用價值である、と言ふ

點に於いてのみ異なるのである。故に此三者は結局同一範疇に屬し、そは一對象と一主體との對立關係に基いて發生する、個人的、主觀的、心理的價值である。次に客觀的價值に進まふ。客觀的使用價值並に客觀的收益價值は、共に、一財が、技術的關係の中に、齎す効果に基くものであつて、此意味に於いて、兩價值は本質的に異なるものではない。只一財の技術的成果の慾望に對する關係が直接なりや間接なりやの點に於いてのみ區別せられるのである。而して兩者は共に技術的概念である。然るに、此等の價值と客觀的交換價值との間には、社會經濟學上より見れば、根本的差異が存するのである。客觀的交換價值は、一財が、社會的交通に於いて、或他の財と交換せられる關係である。従つて客觀的使用價值並に客觀的收益價值は、専ら事物の自然的性質即ちその物理的、化學的關係によつて條件付けらるゝ純粹技術的のものであるが、客觀的交換價值は個人間の交通を前提して初めて發生する社會的のものである。されば一般に經濟學上に於いて、從來論ぜられて來た價值は、此を社會科學上區分する時は、一、個人的、主觀的、心理的價值、（主觀的使用價值、主觀的收益價值、主觀的交換價值）二、技術的價值、（客觀的使用價值、客觀的收益價值）三、社會的價值、（客觀的交換價值）の三つの範疇に分れるのである。(5)

擬吾人は此三種の價值の經濟學上に於ける地位とその意義とを檢しよう。個人的、主觀的、心理的價值に就いて、從來の經濟學者の考ふる所は次の如くである。此價值は凡ての經濟現象の根本に横はるものであつて、そは經濟現象の終局的説明原理たるのである、されば此價值概念こそ經濟學的價值概念、即ち眞の經濟價值で

ある、と。然し乍ら吾人は或概念の一科學内に於ける論理的意義と發生的意義とを混同してはならぬ。即ち假令、個人的、主觀的、心理的價值概念は、經濟現象の説明に對する最終點を意味し、經濟現象發展の始點を構成するも、これを以つて直ちに經濟的概念其自身なりとは斷することは出来ない。抑々個人的、主觀的價值は純粹の心理現象として人間の凡ての合理的行爲を發生せしむる根本動機である。従つて、そは、經濟現象よりもはるかに廣き一般的人間行爲の説明原理ではあるが、決して經濟學固有の概念ではない。此種の價值は、經濟學的價值現象の分析に際して、最後に歸せしめらる可き價值ではあるが、其自身經濟學的價值とは見ることが出来ないのである。他面技術的價值が本來の經濟學的概念たらざるは茲に論ずる迄もないことである。されば v. Bohm-Bawerk も曰く、「木材の熱量價值を例へば説明することは、決して吾が科學の任務ではない、」と。(6) 此の價值は明かに自然科學の對象であつて經濟學に固有の概念ではない。以上二價值に反し、客觀的交換價值は、社會的交通を前提して初めて成立するところの概念である。此價值は單に所有せらるゝ對象に認められる價值ではなく、移轉の對象に於て生ずる價值である。従つて此價值こそ、社會科學としての經濟學上、重要な價值概念である。

扱て以上によつて吾人は從來の價值概念を検し、個人的、主觀的價值並に技術的價值は經濟學固有の價值ではない、吾々の科學内に獨自の地位を占め得るは只客觀的交換價值あるのみである、と言ふことを明かにしたのであるが、此結論は又此を他方面より證明することが出来る。

抑々價值一般は一主體が或客體に對して認めるところの意義である。されば價值は客體それ自身に固有なる性質ではない。又主體の任意に想像したるものでもない。價值は一主體が主觀、客觀を超越せる第三の標準に照らして、或客體を判斷することによつて生ずる統一的現象である。かゝる性質を有する價值は、科學一般に與へられたる共通の經驗の對象である、而してそれは各々の科學の認識目的に應じて加工さる可き素材である。然らば經濟價值は此經驗の對象より如何にして發展するや。哲學は、此經驗の對象としての評價現象に於ける評價の標準に、その學的興味を向けることによつて、彼自身の研究の對象とする。然るに經驗科學一般は、かゝる標準を與へられたるものとして、直接この問題に關係するを許さぬ。自然科學は、此評價現象を孤立せる個々の現象、若しくはその外的、機械的交互作用として觀察しそれより普遍的要素を抽出することによつて、自からの科學の對象とするのである。然るに經濟學は、一の歴史的社會科學なる限り、かゝる觀方を以つてはその研究の對象を構成することは出来ない。經濟學は、社會の成員の評價現象、即ち社會現象として、これを觀察する時、初めて自からの研究の對象とすることが出来るのである。

同一客體に對して評價を行ふ個人が、相互にこれを意識し、此事實が各個人の評價行爲に一定の作用を營む時は、茲に此等の評價者は、評價者としての社會を構成する。吾人は、かゝる社會の成員によつてなさるゝ評

價行爲を、社會的評價現象と名け、かゝる個人によつて認めらるゝ價值を社會的價值と名ける。此に反し、單に孤立せる、或は單に外的、機械的に相互に作用する個人の評價行爲を、個人的評價現象と稱し、かゝる評價行爲によつて生ずる價值を個人的價值と名ける。(7)

然る時は社會科學たる經濟學は後者をそれ自からの研究の對象とすることは出來ずして、前者即ち社會的評價行爲並に社會的價值のみをその對象とするのである。

然し乍ら經濟學は社會的評價現象又は社會的價值一般を、その對象として有することは出來ぬ。此處にも亦社會諸科學の分業が存するのである。然らば經濟學は一般的なる社會的評價現象並に社會的價值の如何なる部分に興味を有するや、が次に生ずる問題である。

元來經濟的評價は、或客體に對する社會人の同一評價の一面にして、經濟學には一定の經濟的評價現象が他から別れて與へらるゝものではない。社會的評價現象を一定の見地の下に觀察するとき、茲に初めて經濟學的概念としての評價現象が生ずるのである。然らば如何なる見地より經濟學はこれを觀察するや。

言ふ迄もなく、經濟學は彼固有の認識條件に基いて社會的評價現象を觀察する。而して其認識條件は既に吾人が他の機會に於いて述べたるが如く、私有財産制と分業制である。(8) 故に經濟學の對象としての評價現象は先づ第一に所有の對象に於いて生ずる社會的評價現象たるを要するのみならず、第二に分業制に基き個人間に移轉せらるゝが如き所有の對象に於て生ずる社會的評價現象でなければならぬ。即ち經濟的交通の對象に於い

て生ずる社會的評價現象である。而してかゝる評價現象に基く價值こそ眞の經濟價值である。

然るに單なる所有の對象に認めらるゝ價值は實體價值 *Substanzwert* であり、個人間の移轉の對象に認めらるゝ價值は職能價值 *Funktionswert* なるが故に、上述の經濟價值の性質を此二つの語を以つて言ひ換ふるならば、經濟價值は先づ社會的實體價值でなければならぬが、然し社會的實體價值が凡て經濟價值たるのではなく其自身としては未だ非經濟的なる社會的實體價值をして經濟價值たらしむるものは社會的職能價值である、即ち社會的實體價值が個人主義的社會的交通過程 *Der individualistische, soziale Verkehrsprozess*. に入る時そこに初めて經濟價值が生ずるのである、と言ふことが出来る。更に換言すれば、社會的實體價值の保持者が社會的職能價值を有するに到るとき、こゝに經濟價值が発生するのである。蓋し *Simmel* が「對象の經濟價值は、それが可交換的として立ち入るところの相互關係に於いて成立するものである。」(9)と述べ *Soda* が「或價值が經濟價值となるや否や……を決するの標準は……、その所有者が價值客體を交通經濟の客體として見るや否やまたかゝる意味に於いて評價するや否やにのみ存す。」(10)と述べたるは、かゝる意味に於いてある。

かゝる意味に於ける經濟價值は、強ひて從來の經濟學が好んで取扱つた價值諸概念の一に充當せしめんとするならば、所謂客觀的交換價值に最も近しと見る可きである。然し乍ら尙兩者の間には見逃す可からざる差異あるを注意しなければならぬ。從來の經濟學者の中には、(11) 凡て財の調達行爲を以つて經濟學上の交換現象なりと解し、例へば孤島のロビンソンの活動を以つて自然と勞働力との交換なりとし、既に此際客觀的交換價值

を云々せんとするものがある。然し乍ら經濟學を以つて一ケの社會科學なりとする吾人の立場よりすれば、かかる場合經濟價值は問題とはならぬ。吾人は、個人的、技術的交換と社會的交換との間に根本的差異を設け、只後者のみを經濟學的概念とする⁽¹²⁾。従つて吾人の經濟價值は只社會的交換過程を前提して成立するのであつて、個人的、技術的交換に基く所謂客觀的交換價值はその概念より除外せられるのである。

以上吾人は二途を辿つて、經濟價值の性質を明かにした。次ぎに残されたる問題は、然らば貨幣は經濟價值を有するや否やである。

三

經濟價值は實體價值を前提して發生するが、實體價值そのものが既に經濟價值たるのではなく、實體價值の保持者に職能價值が認めらるゝ時に初めてその對象は經濟價值の保持者となるのである。換言すれば、凡ての經濟價值は此兩種の價值をそれ自身の中に包含し、經濟價值の一方の極限概念として實體價值が存し、他方の極限概念として職能價值が存するのである。實體價值と職能價值、そは凡ての經濟價值が參與するところの兩極であつて、此二つの性質を有するとき、初めて一對象は經濟價值の保持者となる。經濟價值は實體價值の基礎なくして生ずるものではない、と同時に職能價值なき經濟價值はあり得ない。經濟價值は凡て實體價值を有すれども、經濟價值が經濟價值たるのは、それが實體價值たるが故ではなく、實體價值の保持者が職能價值を有

するからである。従つて實體價值の保持者は、職能價值なくして、それ自身經濟價值たり得ない。又經濟價值は凡て職能價值を有する。然し乍ら經濟價值が職能價值を有するは、それは實體價值を有するからである。従つて經濟價值は實體價值なくして存立し得ない。かゝる意味に於いて、吾人は、經濟價值は實體價值と職能價值の兩條件に基いて可能なりと言ふのである。

然し乍ら、經濟價值に對する此二つの價值概念の意義は根本的に異なる。實體價值は、經濟價值の發生以前既に存在したものであつて、其自身は末だ經濟學の範圍に屬しない。此價值の保持者に職能價值を認めらるゝに至つた瞬間に於いて經濟價值が生ずる。故に經濟價值と職能價值とは概念上同時に生ずるのである。されば經濟價值を論理上、概念上可能ならしむるものは職能價值概念である。此兩價值概念の經濟價值に對する意義を、他の言葉を以つて表はせば、實體價值はその心理的發生的概念であり、職能價值は先天的、論理的概念である。

然るに（社會的）職能價值は、吾人が既に別著に詳論せるが如く、貨幣其自身である。⁽¹³⁾ 貨幣は貨幣たる以上實體價值に執著せず専ら職能價值に基いて獨立の存在を保つ。故に貨幣なる概念を以つて、上述の經濟價值の性質を表はすならば、經濟價值は所有の對象に認められる社會的實體價值が、貨幣によつて客觀的數的に表示せらるゝとき、初めて可能となる、即ち社會的實體價值が貨幣の性質を分有するとき、經濟價值は概念上成立するのである、凡ての財は或意味に於いて貨幣たるの性質を有するが故に經濟價值たるのである、而して貨幣は經濟價值概念の先天的、論理的條件であり、經濟價值發展の Idee である、と言ひ得るのである。され

ば Simmel も曰く、「客體の經濟價值は客體が可交換的として立入るところの相互關係に於いて成立するものなりとすれば、貨幣は此關係の獨立性を取得せる表現である、經濟關係即ち對象の可交換性のうちから、この關係の事實が折出せられ、かの對象に對して概念的な——然し可見的表徴に結合した——存在を取得した、抽象的財産價值の表示である」と。⁽¹⁴⁾

茲に於いて吾人は貨幣は經濟價值を有するや否や、の最初に提出せる問題に對し次の如く答ふる事が出来る。經濟價值一般は社會的實體價值と社會的職能價值との結合するところに生ずる。然るに貨幣は社會的職能價值それ自身である。故に貨幣は自からを條件とする經濟價值を有することは出来ぬと。

されば Knapp は、「もしも比較財が明かに述べられないならば一事物の價值は常に支拂手段價值である、即ち一般的交換手段との比較によつて生ずる價值である、従つて此意味に於いて交換手段それ自身の價值を云々することは出来ない。支拂手段價值はそれ自から交換手段たらざる財のみが有するのである。」⁽¹⁵⁾と、言ひ又 Kirmaier は、「貨幣は價值の客觀化であり、従つて敢て言はゞ事物の性質の主觀化である以上貨幣は自己に於いて實體となつたものを更に屬性として持ち得ないのは自明である。」⁽¹⁶⁾と述べたのである。

(1) E. v. Böhm-Bawerk 氏 Art., Wert "im Hdwb. 3. Aufl. VIII. S. 756 の中に曰く、

„Wert im subjektiven Sinne ist die praktische Bedeutung, die ein Gut für den Interessenkreis eines bestimmten Subjektes

dadurch erlangt, dass dieses sein Wohlfinden in irgend einem Stücke vom Besitze des Gutes abhängig weiss“

- (2) A. Amonn : Objekt und Grundbegriffe der theoretischen Nationalökonomie, 2. Aufl. S. 303.
- (3) E. v. Böhm-Bawerk : Kapital und Kapitalzins, 4. Aufl, Bd. I. S. 159
„Wert im objektiven Sinne ist dagegen die in unserem Urteil anerkannte Tüchtigkeit eines Gutes zur Herbeiführung irgend eines bestimmten äusseren, objektiven Erfolges“
- (4) A. Amonn : a. a. O. S.
- (5) K. Soda : Geld und Wert. 2. Aufl. S. 88—91,
川村壽郎氏譯「貨幣と價值」一六二頁—一七四頁。
A. Amonn : a. a. O. S. 307.
- (6) a. a. O. S. 160.
„Es ist weder das Amt unserer Wissenschaft, für den Heizwert des Holzes z. B. eine Erklärung zu bieten, noch....“
- (7) 社會並に社會現象の概念に關しては Hans Oppenheimer : Die Logik der soziologischen Begriffsbildung 1925 を參照せよ。
たし。
- (8) 拙著 Sozialökonomische Theorie des Geldes, 1931. S. 21/29.
- (9) G. Simmel : Philosophie des Geldes, 3. Aufl. S. 87.
“Wenn nun der wirtschaftliche Wert der Objekte in dem gegenseitigen Verhältnis besteht, das sie, als tauschbare, eingehen,...“
- (10) a. a. O. S. 168

„Das letzte Kriterium imfolgedessen, ob der Wert... wirtschaftlicher Wert wird oder nicht,... hängt nur davon ab,... ob er das Wertobjekt als ein Objekt der Verkehrswirtschaft betrachtet und in diesem Sinne bewertet

(11) J. Schumpeter: Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie, 1908. S. 80.

(12) A. Anohn: Grundzüge der Volkswohlandslehre, 1926. S. 148/150. 物價

(13) 貨幣と物價の關係

(14) a. a. O. S. 87.

„...so ist das Geld also der zur Selbständigkeit gelangte Ausdruck dieses Verhältnisses; es ist die Darstellung des abstrakten Vermögenswertes, indem aus dem wirtschaftlichen Verhältnis, d. h. der Tauschbarkeit der Gegenstände, die Tatsache dieses Verhältnisses herausdifferenziert wird und jenen Gegenständen gegenüber eine begriffliche- und ihrerseits an ein sichtbares Symbol geknüpfte-Existenz gewinnt“

(15) G. Knap: Staatliche Theorie des Geldes. 1. Aufl. S. 8.

„Wenn das Vergleichsgut nicht ausdrücklich genannt ist, dann bedeutet Wert einer Sache stets den lytrischen Wert, das ist, den Wert, der sich durch Vergleich mit dem allgemeinen gewordenen Tauschmittel ergibt; woraus wieder folgt, dass man in diesem Sinne nicht vom Werte des Tauschmittels selber reden kann. Lytrischen Wert haben nur die Güter, welche nicht selber Tauschmittel sind.“

(16) K. Kirmaier: Die Quantitätstheorie, 1922. S. 18

„Ist das Geld die Objektivierung des Wertes, also die Subjektivierung einer, wollen wir einmal sagen, Eigenschaft der Dinge, so ist es auch klar, dass es diese, die in ihm gleichsam zur Substanz wird, nicht wieder als Attribut besitzen kann“